

# 教 仁 名 聞

第21号  
(発行日)

2012年6月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

## 《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

\* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

# 極重悪人唯称仏

さて、その極重悪人というのは、どういう人であるうか。

それは罪悪深き

者であり、煩惱の盛んな私たちの姿である。それが阿弥陀仏のおん眼に映っている私の姿である。

罪悪の〈悪〉とは貪欲・瞋恚しんにいわば欲や怒り、ねたみやおしみ心などの我執我愛の心である。罪悪の〈罪〉とは仏法を疑い、仏法をそしり、仏法を信じない心、これが罪なのである。

こうした悪心や罪の心が私の心の本質であり自性である。阿弥陀仏は見ておられる。そしてそういう私たちを「極重悪人よ」と喚んでおられるのである。

この仰せによって、私たちは自分を悪なる者と知らせていただくのである。お知らせをいただいで、やっと自らが悪なる存在であることが知られはじめるのである。

そして大事なことは、阿弥陀仏が私たち一人一人に対して極重悪人と喚びかけて下さるのは、そんなものをこそ助

けずにはおかない、まるまる引き受けずにはおかない、浄土に至らしめずにはおかないと、大慈悲をかけていて下さることである。

「極重悪人だからお前はダメだ」と突き放すのではなく、むしろ「そんなお前だから助けずにはおかない」と、どこどこまでも見捨てず、よりよって救いの手をさしのべて下さる。その思召しが「極重悪人唯称仏」なのである。

「唯称仏」とは、「唯称仏名」(唯、仏の名を称えよ)のことで、「ただ称えるばかりでよい」との仰せである。私の全分を引き受たもう広大な大悲を示したもうお言葉である。「極重悪人唯称仏」とは、どのような者であろうとも底の底まで降りて助けずにはおかないとの廣大深重なる慈悲のお心なのである。

この慈悲心に触れて初めて、私たちは自分の悪なること、煩惱だらけの身であることを素直に認め、受け入れることがやっとできるのである。

かといって極重悪人という自覚が自分に身に付くかとい

阿弥陀仏の本願は南無阿弥陀仏のいわれとも、あるいは阿弥陀仏の勅命ちよくめいともいわれ

てきた。では阿弥陀仏の本願の内容とは何か。それは第十八願であり、念仏往生の願である。それを一言でいうと「弥陀の本願ともうすは、名号をとえんものをば極楽へむかえん」(「宗祖ご消息」という、阿弥陀仏が私たちにかけて下さっている大悲の御誓約である。それを『正信偈』の句で云えば「極重悪人唯称仏」(極重の悪人は、ただ仏を称すべし)というお言葉になる。

極重悪人とは、私たち凡夫の本当の姿、本質だといわれるのである。この極重悪人という人間の姿は、私たちが自分で自分を反省したり内観して見つかる姿ではない。

いわんや他者を批判する言葉ではない。たとえば人殺しで死刑になる人たちを「あいつは極悪人だ」としばしばい

うが、そういう自分以外の世の中の犯罪者のことを云っている言葉ではないのである。

「極重悪人」とは、阿弥陀仏がほかではない(今のこの私)に向かって喚びかけたもう言葉なのである。どこにおいて喚びかけておられるかという、一番具体的にはナムアマダブツのお念仏においてである。口に称え、耳に聞かされるナムアマダブツの音声は「極重悪人なる汝よ、ただ仏の名を称えよ」の仰せなのである。阿弥陀仏は「汝救い無き者よ。ただナムアマダブツと口に称えるばかりで助けろ、その外に何もいらぬ」という驚くべき約束をしたもうお方なのである。

なぜ、私たちにこういう約束をし、その約束通りに働いていて下さるかという、一切の生きとし生けるものを残らず仏に成したい、救いたいという大慈悲の阿弥陀仏だからである。

# 正信偈に学ぶ問答

(四十二)

## 《五箇盆会法要》

八月十日 (金)

午後二時始まり

(八月二十二日の同朋の会は休みます)

うと、そういう自覚はとても身につかないのである。身にしてみれば自分は極重の悪人であると自覚できるかというのと、悲しいかなできないのである。それどころかどこまでも「我善し」という煩惱が止まないのである。

### 感染凡夫信心発

### 証知生死即涅槃

けれども「極重悪人の汝よ」という仏の言葉を聞かされることによって、自らの高ぶりが反省せしめられ、自らの愚悪なることを聞かされ、「ああ、これが私の本当の姿なのだなあ」とそのつどお知らせをいただくのである。

しかるに、またいつのまにか「私はましな人間である」というところに戻っている。実にどうしてみようとない者なのである。だからこそ極重悪人といわれるのであろうか。

そんな無自覚な、仏法が身に付かぬ私をどこまでも追いかけて「唯称仏」(我が名を称えるばかりでよい)と来て下さる南無阿弥陀仏に助けられるほかはなく、またそこに驚くべき深いなさを感ぜざるを得ないのである。

(了)

(書き下し) 感染の凡夫、信心発すれば、生死即涅槃なりと証知せしむ。

(現代語訳) 愛憎の煩惱に染まった凡夫も、信心が発るならば、生死する身でありながら、生死を超えた涅槃をさとするべき身となると、知らされる。

\*

A 「ここも曇鸞大師の教えて下さったことを讃仰される一節ですが、感染の凡夫とはどういう意味ですか」

D 「惑とは煩惱という意味で、感染の凡夫とは煩惱が深く染みついて、煩惱を取り除くことなどとてもできないような迷える者、いわゆる煩惱具足のことです」

A 「そのような凡夫に信心が発ればといわれるのですね」

D 「ええそうです。真実の信心が煩惱具足の凡夫の心に発起すれば、といわれるのです」

A 「そうすれば、生死するしかない迷いの身でありながら、生死を超えた涅槃をさとするべき身となることを知る、といわれるのですね。」

こののできる浄土に生まれなければ我は仏にならない。必ず浄土に至り涅槃をさとしめる」と決定したもう誓いの言葉です。ですからそれを聞き受けている信心ですから、南無阿弥陀仏を聞けば「ああ、こんな私が阿弥陀様のお力によって浄土に至って涅槃のさとりを開かせていただける、ああありがたい」と喜ばしていただけるのです」

A 「煩惱具足の凡夫でありながら必ず涅槃のさとりを得させていただけの身であると知るような信心が発るのですね」

A 「そうすると(生死即涅槃)というのにはなぜそのようなことを知る(証知)ことができるのでしょうか」

D 「一つには、真実の信心とは仏語を信じる信心です。すなわち阿弥陀仏のお言葉をその通りにすなおに受け入れていくのが信心です。『若不生者不取正覚』と誓いたもう阿弥陀仏のみ言葉を聞いて、その通りに受け入れているのが信心です」

A 「信心にはなぜそのようなことを知る(証知)ことができるのでしょうか」

D 「一つには、真実の信心とは仏語を信じる信心です。すなわち阿弥陀仏のお言葉をその通りにすなおに受け入れていくのが信心です。『若不生者不取正覚』と誓いたもう阿弥陀仏のみ言葉を聞いて、その通りに受け入れているのが信心です」

D 「ただ、この世において生死即涅槃の功德をいただくのと、阿弥陀仏のお誓いを誓いの通りに信じているのです」

A 「(若不生者不取正覚)とは」

A 「なるほど」

D 「阿弥陀仏が(もし汝が我が願力によって涅槃をさとする

という理解もあります。現在の人生の上に味わうことができないという理解です。金子大栄先生は、信心を発すなら、動乱する人生(生死)の中にあって、静かな落ち着き(涅槃)が与えられる、それが生死即涅槃と知ることなのだ」と読んでおられます」

A 「そういう様にも読むことも出来るのですね」

D 「ええ、それと、(生死する身でありながら、浄土に生まれ涅槃をさとするべき身とならせていただく)という場合、このことを現在において確かなことであるとほのかに実感として味わうことが信心によって可能だと思います」

A 「それはどういうことですか」

D 「南無阿弥陀仏を聞くと、阿弥陀仏が(ここに居る、汝を引き受けている)と知らされます。しかも妄念ばかりの

# 木村無相さんの法信1

私の心よりも、阿弥陀仏の方が私の主（あるじ）であり、阿弥陀仏の方が確かな存在であり、私はその阿弥陀仏の中にいることが、ほのかながら実感されます」

A 「阿弥陀様の方が私の主体であることがほのかに知れるのですね」

D 「ええそうです。聖人が阿弥陀仏のお働きを（如来の願船）と云われたように、阿弥陀仏の願力の船に現在ただ今乗せられているのだと、お聞かせいただく時、そうなのだと信受させられます」

A 「現在ただ今、阿弥陀仏におさめとられているということですね」

D 「ええ、そうすると（必ず浄土にて涅槃をさとらしめる）といわれる阿弥陀仏の仰せが、確かなことなのだと信受させていただけるのです。今が阿弥陀仏の上に乗せられているのだから、（ついに阿弥陀仏と一つになる、いわば涅槃をさとらせていただける）ということが、ほのかながら本当なんだなあと受け取られるのです。ああ有難いことだと」

A 「そう知らされることを証知といい、生死の身でありな

がら必ず涅槃をさとする身にしていたけると喜ばせていただくのを（証知生死即涅槃）といわれるのですね」

D 「ええそういただいています。ただし、私の場合はまだまだそういう実感はほのかです。しかし、阿弥陀仏に抱かれていてという実感は年月を送る中で少しずつ強くなっていくように思っています」

A 「法然聖人が（いけば念仏の功つもり）とおっしゃっていますがお念仏を相続していく生活は阿弥陀仏と人との有難い関係の実感がより深まっていくことをいわれたものでしょうね」

D 「ええそう思います。松並松五郎さんが（お念仏を続けていくと阿弥陀様と私の間の親子の情が深くなっていく）といわれたのを思い出します」

A 「そうすると、信心をいただいた後のお念仏は佛恩報謝といわれますが、阿弥陀仏に撰取されている感覚を深めて下さる功德があるともいえるのですね」

D 「ええ、行が信を深めていくということは当然あると思います」（了）

木村無相さんから、当時、信心の問題で悩んでいた私（土井紀明）宛の、昭和五十七年六月から亡くなられる一年半ほど前（昭和五十八年十二月）までの

お便りをできるだけ忠実に記載します。念仏の信心を求める人の光になれば幸いです。なお、個人的な生活内容の部分はかなり割愛しています。今後、順次掲載する予定です。

五十七年六月七日期。和上苑二階にて。仰臥 無相

紀さんー 白ソコヒだが、手術出来ない目、半年目ごと位にグット見えにくくなるのです。が、正月以来、半年前から、又、グット見えにくくなりました。この分では、今年中にはタヨリも書けなくなるのではないかと思っています。それで今のうちに、書きたいことは書いて出したく思っています。

さて、もう一度、三河のおその同行の「無仏法」の御縁に合わせて下さい。私としてもありがたく、紀さんとしてもありがたいとのことですから。『信者めぐり』六十五ページ、亡き三河

おその同行の物語の中の七十一ページ、

三州高棚村の空林寺くうりんさんが、おそのに來てもらって、「私は仏法がないで困っている。どうか、仏法に入る道を聞かせておくれ」。おその「わたしも仏法は少しもない。ないゆえに、仏法様に助けられるのがうれしい」。空林寺「そんな薄情なこと言わんと聞かせておくれ」。おその「ワタシに仏法があると思うて呼びつけなされたか、それはマチガイというものじゃ。ウソでもないでもない、ワタシにはミジンばかりも仏法はない。ないゆえに仏法様に助けられるがうれしいよりないわいのう。マア今日は寒いでもう帰ります。ごめん下され」と、帰ったとのこと。

「ワタシに仏法はミジンもない」というのは、おそのさんのホンネでしょう。これがイワユル「機の深信」でありましょう。マルキリ仏法がないから、仏法さまに助けられるホカない、ただ念仏せよの如来・聖人の仰せよりホカない。ー

なかなか、「ワタシに、ミジンも仏法がない」と気づかされな

いのである。「ワタシにミジンも仏法がない」ということさえハッキリわかったら、「如来さまバツカリ」「ただ念仏ばかり」よりホカはないことになる。水ケが一寸もなくなつて、ノドがカラカラにかければ、信用出来る人が「さあ、この水を自由におのみなさい」と、さし出して下さつたら、信ずるも、ウタガウもない、喜んで、ただガブガブといただくことでしょう。

地獄一定すみかの身（無仏法の身）、それは「ただ念仏せよ」のよき人の仰せをウタガウも信ずるもなく、いただいで、仰せのままにただ念仏してノドのカワキをうるおすことでしょう。

「ワタシに仏法は、ミジンもない」ということが、ナニヨリ大切なので、「自分に仏法がある、仏法はわかる」と思っているほど、「ただ念仏せよ」「称我名字」の仰せはいただけぬ。それだけ、苦しまねばならぬ。ラクになれぬ。是非、善悪、正邪、肯定・否定、から解放されない、信不信からも。

つくづくおその同行の「ワタシに仏法はミジンもない」は大切。今だけでない。久遠劫より尽未来、ワタシには、仏法がミジンもないので迷うて居るので。今朝はこれにて。

# 信心夜話

『一蓮院談合録より』(7)

(太字の文が一蓮院秀存師の言葉です。カッコ内は私の所感)

○ 勅命は 唯一声と 思いしに 今日もくる日も 弥陀の呼声

(勅命の一声が聞こえた最初の時を初一念という。勅命とは「助ける」(引き受ける)「ここに在る」の一声である。阿彌陀仏の一声である。初めてこの一声が聞こえたら、それで済んだのであるが、不思議なことにその一声が来る日も来る日も続く。極めて有難いことである。なぜそうなるのかわからない。この世の人生上の出来事はすべて過去へ過去へと過ぎ去って留まるものは一つもないが、この弥陀の喚び声の一声は、何時も新たに、反復されて消え去らない。阿彌陀仏に撰取されたということの実際はこの一声となつて連続するまことが私と離れなくなるということであろう。この弥陀の喚び声は具体的には称名念仏の声において実感される。だから自ずからお念仏は称えられ、また称えずにはおれない。

初一念という信の一念の時にかぎらず、信心があるうがなかるうが、ナムアミダブツが私の口に出て下さつたら、それは「汝を助ける」(連れていく)の阿彌陀仏の大悲の喚び声である。一声のお念仏は、一声の勅命である。ただそれをそうと知らないだけのことである。その

ような喚び声は十方の世界に響き渡っていると云われている。大経に「響き十方に流る」との仏語があるが、響流十方の阿彌陀仏の喚び声が人間の言語として音声となつて私たちの耳に聞かれる、それが称名念仏の一声であろう。)

○ かるいのが等活地獄。私はそんなかるい所ではない無間地獄だ。六十小劫がこの地獄の一日一夜になる。何と恐ろしい身の上じやないか。それがなあ、如来様が助けてくださると云うこと一声聞くと、地獄脱がれるどころか安楽浄土へ往生ができるぞや。

(このまぶたが閉じ、息が切れたら一体私はどこへいくのか。現代人はそこをどう思っているのか、考えているのか、感じているのか。死後のことなど問題にしないというのが今日の知識人の姿であり、それが一般人の見習うことであるらしい。しかし、「私は一体どこへ結局行くのか」を問題にすることによって、思いもかけない真実にであうことができ、そういう大事な縁になるのが死と死後の問題である。死んでどうなるかを問わないということは、真実にあう縁を自ら捨てることにもなる。昔から後生の一大事として、それを問題にして真剣に救われる道を求め、その結果普遍的な真実にであつた人は数知れないのである。「死んだ先など私はどうでもよい、今さえよければ」と日々をうかうかと過ごしてしまふのは真に惜しいことである。さてこの法語は、我が身の悪を知れば、死

後は地獄ではないか、それも恐ろしい無間地獄ではないかと、無間地獄と聞いても何とも思わない愚鈍な私へのおさとしである。同時にそんな私を助けるという阿彌陀仏の大悲を一声の念仏に聞く。一声の仰せにおいて、地獄行きの身が浄土行きに転せしめられるとは、ああ誓願の不思議なることよ。広大な大悲であることよ。)

(了)

## 往職雑感

学校教育で「人間は、誕生の最初、受精卵として生じ、細胞分裂して発達しやがて脳が出来、そこから意識(心)が生まれた」と何度も習ってきて、それが当然の様に思ってきた。神経細胞の束が脳となつてそこから心が生じたとする、心は脳から発生したのであるから、脳死になると心も滅することになり、死んだら人間は灰になる、ということになる。それに対して西田幾多郎が『哲学概論』に

「宇宙はもと単に物質的であり、その宇宙発展の段階で生命が現れ、更にその生命がある程度にまで発展した上で意識が生じた、このやうに意識は結局物質から生じたのだから物質が意識よりも根源的である」という。

しかし物質がまづ現れたのだからと云つて、直ちに物質の中に精神的なものが潜在的に含まれていなかったとは云えないであろう。むしろ世界の根底には潜在的に精神的なものがあり、それが物質の発現を可能ならしめたのかも知れない。少なくともそれは、人間の本質が幼児の最初から明瞭には現れないという如きも

のであろう。とにかくこの議論は潜在と意識を忘れた議論なのである。時間上後に現れるものが却つて本質的なものであるとも云えるのである。」

と言っている。これによると、精神的な領域は世界の根底に潜在的にあるとも言える。そうすると、神経細胞の出現と増殖によつて、その結果、脳となり、そこを場として潜在的な意識の働きが顕在化してきた、とも言い得よう。

実際、アリのようにな小さな生き物に近づくと逃げる。逃げるということは、知覚し判断し選択するという「心」がある証拠である。しかし、アリに人間のような脳があるとは思えない、況んや微生物においておやである。ただ神経細胞があるということは確かであるから、神経細胞(あるいはその束)があるなら、そこに知覚の作用があるといえよう。しかしこのことは本当はきわめて不思議なことである。「神経細胞の結合システムから知覚作用が発生する」と科学者は簡単にいうが、何故そうなるのか。その理由は全くの謎ではないか。知覚する、知るといふ驚くべき働きがどうして細胞という物質の働きに現れるのか。「神経細胞が知覚するという意識を生み出した」というが、はたしてそうなのか。むしろ意識の領域が世界の根底にあって、それが神経細胞を縁として、その働きを顕在化してきたといえるのではないか。

ここは議論の分かれるところであろうが、もし、神経細胞(あるいは脳)の発達を場として、すでに潜在的にある意識界が顕在化してきたとすると、たとえ脳死となつても意識の領域は存在し、心の働きは存続していくともいえる。

(了)